

金達寿「玄海灘」試論

伊藤 信夫

— 大学闘争のなかに明け暮れした —

私の二〇歳の一つの記念碑として

全国の学園でたくかう仲間を送る —

一九六九年一月二四日

目次

序	P36
第一章	金達寿における民族意識の確立	P40
第二章	「玄海灘」論	P45
		P52

序 章

他民族を抑圧する民族に自由はない。

— エンゲルス —

一九一〇年の「日韓併合」以降、祖国を、言語を、文字を奪われた植民地朝鮮の作家たちは、苛酷な日本帝国主義の支配にたいする怨念の声を、日本語で書きつづけた。この李泰後・金史良・韓雪野等をはじめとする朝鮮プロレタリア芸術同盟（カッパ）の輝かしい伝統は、金達寿の作品のなかに力強く生きている。

民族の独立を失い、母国語を自由に使うことを許されなかった植民地朝鮮の作家たちは、検閲の目をたくみにくぐりぬけながらも、被抑圧民族の苦悶を奴隷の言葉にたくして表現した。彼らの文学にとって日本帝国主義との対決は不可避のテーマであり、その創作活動は、民族の独立と祖国の解放を切望する鮮烈なモチーフによってつらぬかれていた。しかし、検閲と他民族の言語という二重に困難な要因が、かえって激しいモチーフを内に深く燃焼させ、植民地朝鮮の作家たちのリアリズムを深化させていったのは、なんとも皮肉な歴史の弁証法である。だが、この苦しむかいは、すぐれた抵抗の文学とともに、「日本帝国主義イデオログたちによって操作された朝鮮人蔑視政策」に屈服し、民族主義を一層強め、その脱皮を「日本人化の道に求めた日」張赫宙のような

落伍者をも生みだした。民族意識を喪失した彼は、在日朝鮮人同朋を「異邦人」の目で描き、「自国への侵略者」「加藤清正」を英雄として(2)「賛美するところまで墮落したのである。任展慧は、張赫宙から野口赫宙にいたるまでの彼が歩んだ転落の道に、在日朝鮮人作家の戦争責任を追求する出発点をみいだしているが、日本人である私には、植民地支配の傷あとの深刻さに、たえられない思ひの方がさきにくる。

また今日、これら朝鮮人作家の作品が、日本近代文学史のなかに、正しく位置づけられていないどころか、まったくふれられてもないという事実には、疑問というよりも、むしろ激しい憤りをおぼえる。

戦前の特殊な歴史的事情を考えた時、彼らの作品を西欧の文学者や中国の作家が日本語で書いた作品と同列視したり、他国者の文学として切り捨てることはできない。まして、韓雪野の「黄昏(3)」、李泰後の「不遇先生」や「東城令監(4)」、そして金史良の「光の中に(5)」等の作品は、立派に近代文学としての評価にたえられるものであるばかりか、民族の現実と相ざした、日本の自然主義文学にはない新しい人間像の造型に成功している。このうずめられた作品をほりおこし、大胆に日本近代文学史の扉部をえぐることによって、日本の当時の文学、ひいては戦時下の精神史の空白をうめる一つの新しい視点を導んでくるのではないだろうか(6)。

現在の日本近代文学史のなかにある数ページの著述、

もし根強く私たちの生活のなかに生きてくる朝鮮人にたいする差別意識や優越感と深いかわりをもっているのなら、許すことのできない問題である。天皇制ファシズムのアジア侵略は、いうまでもなく日本人のほうだいな犠牲のうえに築かれたものである。しかし、それは同時に、私たちの祖国日本が、欧米帝国主義の先兵としてアジア人民を収奪し、支配してきた歴史でもあった。このことは、明治維新以来、一五回にわたる対外侵略のなかで、日露戦争、青島攻撃、シベリア出兵、太平洋戦争のぞけば、あとはすべて朝鮮・中国等アジアへむけての攻撃であったという記録が、なによりもはっきりと物語っている。

この恥辱にみちた過去と、そのなかで育ったアジア認識が、今日どのようなかたちで、日本文学のなかに暗い影を宿しているかを探ることは、日本の文学者にとって民族的責務である、といっても決して過言ではない。

そして私は、日本の近代文学が、一九世紀のフランスやロシア文学にみられるような広範な国民的基礎と社会性をもつことができなかつた要因の一つを、このなかに見る。天皇制の圧迫からの解放を希求し、人間性の解放と拡充をもとめて生きた、さまざまな人民の願いを底流として自己の文学的伝統をかたちづつた日本の近代文学が、そのなかに、健全なナショナリズムと国際連帯の思想をもつことができなかつたのは、致命的な欠陥である。

ることができなかつた⁽¹⁰⁾のである。それにしても、あの時代に、プロレタリア国際主義の精神的萌芽をつちかした彼の業績は、今日、いくら高く評価しても、評価しすぎるといふことはない。

また、白樺派同人の一人柳宗悦は、朝鮮人民の独立と主権を侵している日本の侵略政策を激しく非難するとともに⁽¹¹⁾、三、一独立運動を肯定し、朝鮮の人民と芸術を深く愛して、その伝統の発展を願った⁽¹²⁾。そして、一九二四年、京城に「朝鮮民族美術館」を開設し、朝鮮文化の保存に、青春の情熱をかけた。この「柳の朝鮮観は三・一運動と、日本の大正デモクラシーの影響下の白樺派ヒューマニズムの接触を、背景として画いたものである⁽¹³⁾。」彼の死後、彼の残してきたものは、むしろ第二の祖国である朝鮮においてさまざまに評価されており⁽¹⁴⁾、日本ではあまり知られていないのが実情である。

この他に、プロレタリア国際主義とアジア民族の解放に生きた片山潜やゾルゲ事件の尾崎秀実らの存在も忘れてはならない。これらは貴重な歴史的遺産であり、「冬の時代」、ファシズムの「暗い谷間」に、このような人物を生みだしたことこそ、日本近代一〇〇年の歴史のなかで、私たちが誇りうる数少ない栄光の一つである。

昭和初期のプロレタリア文学運動のなから生れてきた、黒島伝治の「糧」「渦巻ける鳥の群」や「武装せる市街」、横村浩の長編叙事詩「間島バルチザンの歌」等の作品は、こうした精神的脈に根ざしたものである。

あの夏目漱石でさえも、一九〇九年の「満韓とこころ」では、中国人を「チャンチャン」と呼び、高浜虚子にいたっては、一九一一年に書いた「朝鮮」で、被抑圧民族である朝鮮人民の生活を見て、「流石に日本人は偉い」と感嘆し、「自己も其民族の一員として抑へ難き誇⁽¹⁵⁾」さえ感じている。近代的自我の確立をめざしていた作家たちでさえも、抑圧された中国・朝鮮人民の姿を、このようにしか見ることができなかったのである。

日本の近代文学の悲劇の一つは、植民地アジア人民の苦痛を、自己の苦しみとして受けとめられなかつたところにある。これは、「支那遊記」を書いた芥川龍之介、「上海」の横光利一や「北京」の阿部知二にもいえることである。

しかし、私たち日本人は、もう一つの中国観・朝鮮観の伝統をもっている。石母田正の「統歴史と民族の発見」のなかに、幸徳秋水が、どれだけ「アジア諸民族にたいする愛情と連帯の精神をよくしめして」いたか。「帝国主義的支配民族の革命家におちいりがちな、民族主義的偏見を一点もまじえずに」、「中国が露国について、革命の中心となることである」と予想していること⁽¹⁶⁾が語られている。だが、この幸徳秋水ととも、「支那民族としての日本の社会主義者であつて、被圧迫民族の革命家でなかつたという事情」から、「被圧迫民族の帝国主義にたいする民族の解放と独立の闘争の過小評価⁽¹⁷⁾」があり、「祖国の問題、愛国心の問題を一面的にし論ず

だが、このすばらしい思想的・文学的遺産も、日本近代文学の確固たる国民的伝統として定着させるところまでは、いたらなかつた。いしかえれば、それほど日本の近代は暗く、この一筋の光も押しつぶしてしまふほど重くよどんでいたのである。

かつての侵略者・抑圧民族であつた日本の地位は、一九四五年八月十五日をもって逆転し、対米従属という被抑圧民族の立場に立たされ、独立を喪失した。しかし、いままた日「韓」条約の締結以後、東南アジア諸国に対して、アメリカへの従属を深めつゝ、帝国主義的侵略の牙をむきだして襲いかゝっている。そうしたなかで、敗戦の口、国土よりもっと大きな荒廃をきたしていた日本人の「父祖四代にわたる精神的頑病⁽¹⁸⁾」が、ふたたび息を吹きかえしてきようとしている。

敗戦前の自由と人権を無視した軍国主義教育は、アジア諸民族にたいする蔑視観と優越意識、主体的な軍国主義賛美の心情を人民の意識のなかに根強くうえつけてきたのである。

日本の大國主義的排外主義を形成するためには、自らの最も痛いアキレス踵であるはずの「沖繩問題」でさえも、サンフランシスコ体制の強化に逆用しようとする支配階級が、この人民がかゝえている「精神的頑病」をほうっておくはずがない。ネオ・ファシズムが、新しい抬頭をみせてきているなかで、朝鮮にたいする日本人の歪んだ認識は、かならずや日本の帝国主義復活にとって、

有力なイデオロギー的武器の一つとなるであろう。

この虚偽意識との対決は、最近はやりの真の戦争責任者ぬきの「加害者意識」論では、決してたゞかえない。今日、民族の矛盾とは、最も精鋭な力たちであらわれた階級的矛盾である。

かつてドイツ農民戦争において、農民たちは、「我々を辱かしの鎖から、我々は輝く剣を鍛えだすのだ」(Aus der Kett der uns entehrt — Schlicher für ihr Elitzend Scherzt) というスローガンを口々にとなえて、領主階級とたたか

った。私たちもまた、過去数十年の「精神史的頑病」から訣別し、すぐれた国際連帯の伝統のなから、民族の独立と人間性の解放を統一的に把握し、文学を国民全体へ解放する新しい文学の方法を鍛えださなければならぬ。そのことは、たんなる「精神史的頑病」からの回避ではなく、それとの対決をおして、現在の新植民地主義(ネオ・コロニアリズム)の否定とそれからの自己解放を内容とする新しい人間の創造の課題でもある。

そのためには、日本人のアジア、とりわけ朝鮮の現実をあまりにも知らないという弱さを早急に克服し、私たちの七〇年代闘争が、どれだけアジアの民族解放闘争によって支えられているかという認識をもたなければならぬ。現在の日本の帝国主義復活が西ドイツよりも十数年以上遅れている原因の一つは、六〇年安保闘争に象徴される日本人のたゞかいたゝもに、四九年の中国の解

放、五〇年の朝鮮戦争におけるアメリカ帝国主義の敗北、そして今年の六月八日の南ベトナム臨時革命政府の樹立であることを決して忘れてはならない。

私たち日本人は、アジアに生まれ、アジアに育ってきただにもかゝらず、アジア人としてものを考えることが、あまりにも稀薄であった。私たちの意識のなかには、福沢諭吉の「脱亜論」にみられるような「アジア人として」ではなく、「アジア人にたいして」という思考の残りカスがある。このことは、今後のアジアと日本の変革をかけた七〇年代の階級闘争で、つねに根本的に問いかえされつゞけるであろう。

関東大震災の朝鮮人虐殺が、どうしてふせげなかったのか、という問題は過去と未来の日本人の歴史の問題であり、そのことに解答することが、私たち現実と文学の変革をめざしている者の重大な使命となってきた。金史良の伝統をうけつぎ、日本近代文学の健全な民族意識と国際連帯の思想をまなんだ在日朝鮮人作家金達寿が、「民族の独立と人間性の回復」という課題を、どのように自己の文学の方法として確立しようとしているかを追求するなかで、私たちの文学と民族の正しい連関性を解明していこう。

註 序 章

(1) 任展慧「張赫宙論」(岩波・雑誌「文学」昭和四十年十一月号)八九ページ

(2) 同右 九一ページ

(3) 韓雪野「黄昏」李殷直訳(朝鮮文化社)上・下二巻

(4) 李泰俊「福徳房」(東方社・現代朝鮮文学選書)所収

(5) 金史良「金史良作品集」(理論社)所収

(6) 安永武人「戦時下の文学」その三「皇民化」に抗して—朝鮮の作家たち—(同志社国文学)第三号。昭和四十三年)五八ページ

(7) 金達寿「日本文学のなかの朝鮮人」(岩波・雑誌「文学」昭和三十四年一月号)一ページ

(8) 石母田正「幸徳秋水と中国—民族と愛国心の問題について—」(東京大学出版会「統歴史と民族の発見」所収)三二三ページ

(9) 同右 三二八と三二九ページ

(10) 同右 三四〇ページ

(11) 柳宗悦「朝鮮人を想う」(「読売新聞」大正八年五月二十日と二十四日)

(12) 同「朝鮮の友におくる書」(「改造」大正九年六月)「朝鮮とその芸術」序(大正十一年)以上三論文は彼の著書「朝鮮とその芸術」(旧版大正十一年、新版昭和二十九年)所収

(13) 幼方直吉「日本人の朝鮮観—柳宗悦を通して—」(お茶の水書房「歴史像再編成の課題」所収)三二〇ページ

(14) 無署名「柳宗悦先生を想う」(「統一朝鮮新聞」昭和三十六年五月)

金熙明「柳宗悦先生と朝鮮の芸術」(「親和」九号昭和三十六年六月)

李弘直「柳宗悦翁と韓国」(「朝日新聞」昭和三十六年八月二十八日と三十日)

(15) 服部之総「東洋における日本の位置」(理論社「服部之総著作集」第六巻所収)二六八ページ

(16) 上原専祿「世界史における現代のアジア」(未来社)八一ページ

第一章 金達寿における民族意識の確立

作家金達寿の歩んで来た道は、同時に、一人の朝鮮人が破壊された民族の主体をとり返し、民族意識を回復する苦悶の道でもあった。

このことは、「玄海雜」によせられた、一文学サークルの手紙にたいする返辞のなかで、次のように語られている。

「朝鮮人である」あなたが、日本にいて「しかも日本語で小説をかいて」いるのは「どうしてですか」という残酷な質問に対して、作者は—

「民族は、人は平等でなくてはなりません。そのためには、私たちはお互いに理解しあわなくてはなりません。かつて(いまも少しそうですが)私はこの不平等のゆえ

に、この日本語をこんなに「上手」におぼえることができました。しかし、私はこの日本語を、何かほかのことに役立てようとは思いません。それを私たちの民族の平等、人間どうしの理解のために役立てたいと思います。そして、それが私たちをあの不平等、無理解なところへ突きおとしたものにたいする私の復讐になっていくとしても、あなたはきつとそれを理解して下さるでしょう。復讐とは、少しことばが強すぎるようですが……(17)

(傍点—伊藤)。
戦後なお朝鮮人作家が、日本語で小説を書くということとは、私たち日本人には想像できない苦痛と抵抗をとまなうだろう。しかし、それでもなおかつ、自分たちを無知と貧困と差別のどん底にたゞき落した者たちへの「復讐」。そして、なによりも日本人と朝鮮人の民族として、人間としての断層をうめる絆に、自己の文学をさげよいうと刺切っている作者の立場は、その生いたちと「民族」としての日常めの特異性をぬきにしては理解できな。

一九一九年、一月二七日(旧暦)、没落過程にある中農の三男として金達寿は、朝鮮・慶尙南道に生まれた。作者が生れるとともに、家は急速に衰退し、両親は五歳の作者を祖母にあずけて、日本に渡航した。だが、間もなく、二男と父死亡の知らせが作者を訪れたのである。一〇歳の時、迎えにきた兄声寿とともに、日本に渡航したが、その後は、東京を中心に転々としながら、「ガ

ラス工場、乾電池工場、湯屋のカマ焚きなど」さまざまな所で働いている。神奈川県横須賀に移ってから、「映写技術見習、屑屋、土工、また屑屋」をしながらも、貧しさに負けることなく、早稲田大学の「文学講義録」をとりよせて独学をしながら、張斗植とともにガリ版雑誌をつくっている。それは、当時の在日朝鮮人の常として、「貧しく暗く暗闇のなかで眼だけを光ら」せた悲惨な生活であった。

作者は一九歳になると、学歴をごまかして日大の芸術科に入学した。その翌年、「位置」という短編を雑誌「芸術科」の八月号に発表している。

この小説は作家金達寿の出発点をかざるものであるが、それだけに、作者のもっている弱点が、非常にはっきりと出ている。物語は、朝鮮人学生と棚網という日本人の共同生活を描いたものであるが、結局、棚網の乱れた生活といわれのない優越感によってこの生活は破壊する。登場人物の棚網にはモデルがあったそうだが、ストーリーはすべて虚構であると作者は語っている。しかし、私はこの作品のなかに、私小説の色濃い影響を見る。

金達寿が、この私小説リズムから脱皮して、新しい小説の方法をどれだけ確立していったかを見ることは、作者の作品の成長をさぐる重要な批評の基準である。そして、それは同時に、作者がどれだけ深く朝鮮民族がおかれた現実のなかに切り込んでいったかを知るメルクマールでもある。

この頃の金達寿の異様なまでの学習意欲をさげえていたものは、コンプレックスである。幼い日からの苛酷な生活、惨めな被抑圧民族の運命から逃げ出したいという願いが苦学生生活を切りぬけていく力となった。だが、この「成り上り根性」は、民族的コンプレックスの裏返しとして出てきたものである。

就職差別が厳しかった当時、作者は幸運にも、戦争による一年くり上げ卒業で、神奈川新聞社に入社することができた。その前年に書いた「雑草の如く」という作品が、この二つの気持ちを突によくあわせている。

自然主義文学を思わせるような、悲惨な在日朝鮮人一家の情景描写からはじまるこの作品は、初期の作品に共通するぬけ道のない暗さをもっている。また、主人公である太俊には、そのまゝ作者の二つの気持ちがたくさされている。

川崎の郊外にある航空計器会社の就職試験を受けに行くと親友の了守につきそった太俊の目に映る職業指導所員の意味深い微笑、「島の向うを走っている電車が、みるみるうちによそよそしく、遠い他国の地を走っているように遙かに見えて来るのであった」という敗北主義的郷愁感。そして、「まあ待て、それで僕は就職をする。断然僕は就職してみせるぞ……(中略)……このK新聞を知っているだろう。先ずそこへ入るんだ。もちろんあんなK新聞に入ることがわれわれの追求する目的ではない。だがいまは先ずこゝへ入るんだ」とむき

なる太俊の立身出世主義には、哀愁と憤怒という作者の二つの顔があった。

この金達寿の個人主義的抵抗の域をでないあまり現実認識は、ある日本人女性との恋愛の破綻を経て、大きな転換の時期をむかえた。恋愛の場まで貫徹されている支配と被支配という民族の壁を否定なく再認識させられた作者は、この年(一九四三年)の五月、神奈川新聞社を退社して、単身、故国朝鮮へ渡ったのである。

恋愛と偏見で傷ついた心をいやしてくれる暖かさを、祖母と暮した朝鮮の土にもとめたのかもしれないが、この渡航は、作者の一生を大きく変えてしまった。作者自身「私がいま朝鮮人の一人であり将来においてもそうであるのは、不幸な故国における短いこの期間があったからである」と語っているが、この時期の体験こそが「玄海灘」の作者金達寿をつくりあげたのである。

ソウルの大新聞社である京城新聞社に入社することができた作者は、想像を絶する故国の貧しさに直面した。そこで作者が見たのは「乞食の街」植民地朝鮮の顔である。この現実の前に、作者は朝鮮人としての自己を厳しく認識せずにはいられなかった。なかでも、金史良とめぐりあい、同世代の青年たちが民族解放運動に立ちあがっている姿を見て、大きな衝撃を受けたが、「学徒出陣」の「栄光」を与えられそうになって、翌年の二月、日本にもどって来ている。

しかし、私はここで、一つの疑問をいだかざるをえない

い。一年にも満たないソウルでの生活が、作者を「怒号」
せすにはいられない人間に作りかえたことはわかるが、
それだけに、なぜ作者は日本へ舞いもどって来たのだろ
うか。故国朝鮮は石をもって作者を追ったかもしれない
が、なぜ朝鮮の民族解放運動に身を投じなかったのだろ
うか。はたして私の言っていることは無理なことかもし
れないが、どうしてもこの点が気がかりになってくる。

ソウルを脱出するようにして日本へもどって来た作者
は、ふたたび神奈川新聞社に入社した。この時には、も
はや民族の独立なくしては個人の尊厳というものはない
という民族的自覚をもって、自己の出世主義からの離脱
をはじめていた。そして、激化していく戦争のさなかに
作者はソウルでの体験をもとにして「後裔の街」を書き
始めたのである。

東京で教育を受け、アナトール・フランスを研究して
いた一人の「半日本人」の青年が、故国の現実のなかで
苦悶し、「民族」を発見していく姿を描いたこの小説は、
「玄海灘」に直接先行するものである。

従妹英梨の強い誘いと郷愁の念にかられて故国朝鮮に
帰った高昌倫は、「誰を見ても焦点に向う迫力のない、
それが朝鮮人である限りは、みな弱々しく倦み疲れた内
面の姿を際わしている」(中略)：「乾涸らびた群集
」や、むかしのように胸をひらいては語ってくれない
旧友を見て、いやでも独立を失った民族の悲劇を感じず
にはいられなかった。統制された言論のなかで、新聞記

者としての自己を制御しなければならぬ崔啓友。従妹
英梨との恋愛をとおして朝鮮の古い慣習につきあたり、
苦しみながら成長する高昌倫と、二人の知識人の視点を
通して自由なき祖国を描いたこの小説は、作者の「玄海
灘」「太白山脈」へとつづく民族的ロマンへの序曲でも
ある。

一九四五年六月、神奈川新聞社を退社し、八月一五日
の敗戦を横須賀で迎えた作者は、この日の感想を「盛装
したくなりましたね」と語っている。三十六年にわた
る長い間、日本帝国主義の支配下にあった植民地朝鮮の
人民が、かくしきれない喜びをもって、この日をむかえ
たことを、実によくいいあらわした言葉である。

さっそく作者は、翌一六日に「横須賀在住朝鮮人同志
会」をつくり、九月のはじめに結成大会と、エネルギー
ジュな活動を展開したのだが、当時まだ残っていた特高
警察によって阻止され、戦後逮捕第一号となった。この
間、在日朝鮮人連盟(朝連)の活動に参加しながら、雑
誌「民主朝鮮」を創刊し、編集長になる等、活気横溢に
立ちまわり、戦後の「解放」の空気を満悦するのだが、
「朝鮮の解放と独立とは思ったようではなかったことも
しだいに明らかに(24)」、日本の「民主化」も大きな
逆流の渦のみこまれる時代がやって来た。

もう敗戦の翌年には、四月六日の幣原内閣打倒人民大
会への警官の発砲、アチソン声明、マッカーサー指令に
みられるような反共主義と人民弾圧が始まり、日本は朝

鮮戦争への道をまっしぐらに突き進んでいった。彼が教
えていた東京の朝鮮高等学校も、米軍と政府の手によっ
て、四九年には、閉鎖されてしまったのである。それと
ともに、朝連の活動も、日本政府の社会主義国敵視政策
によって、帰国事業から在日朝鮮人の生活権を守る運動
へと重点の置き方がたが変っていった。

金達寿自身も、その頃の実践活動のなかから、「私は
孤独で、一人でもやれるものとして文学・小説をかくこ
とをえらんだ。そうして私は一人の朝鮮人としての立場
から、朝鮮人の生活を描いて、まず、さきにいって日本
人の(誤まった)伊藤)認識に訴え、働きかけようど
したのである(25)」という意識から、明確に「認識に訴
え、働きかける」だけではダメなのである。私が自分の
その行為を真に有効なものとするためには、こういう受
け身の姿勢で「訴え、働きかける」だけではなしに、そ
こから進んで、認識それ自身を変えようにしなくては
ならないのである。その認識のよってできた、現実そ
のものを変革しなくてはならない(26)」という方法の自覚
にまで自己を高めていった。

たゞたんなる朝鮮人にたいする理解というのではなく、
もう一步深く、日本人の歴史的にきずきあげられてきた
歪んだ朝鮮人観に挑戦し、そのイメージをたゞしていく
ことへと作者の文学活動は進展していった。そして、そ
のこのなかから、作者の健全なインターナショナルリス
ムに貫徹された民族意識の確立を通しての人間性の解放

という文学の方法が、主張されてきたのである。

最後に、この方法がどれだけ作品のなかで成功してい
るかを分析する前に、一つの問題を提起しておきたい。
それは、金達寿が日本語で作品を書きつづけていること
が、私にはどうしても理解できないということである。
作者の成長過程を追跡してきた者が、こんなことを言う
と唐突に聞こえるかもしれないが、戦後二十四年、「解
放」された民族が、なぜいまだに他民族の言語で文学を
書かなければならないのだろうか。日本人に朝鮮人民の
置かれている現実を訴えるというのなら、まず朝鮮語で
書いて、それを翻訳すればいい。

朝鮮語で書くということは、朝鮮人としてものを考え
感じ、とらえるということ、密接に結びついていると思
う。しかし、それはなにも、金達寿が朝鮮人としての自
己を解放していないということではない。だが、作者ほ
どの高い方法の自覚をもって書いている者が、いやもって
からこそなお、朝鮮語で作品を書かないということに疑
問をいだく。これは、在日朝鮮人作家の現状を知らない
者の暴言かもしれないが、私は日本近代文学史のなかに
朝鮮人作家が不当に排除されていることを指摘し、その
正当な評価を提案したが、そのことは、もちろん彼らが
朝鮮の文学史のなかで、正しく位置づけられることを前
提とした発言である。それだけに、民族にとって切り離
すことのできない言語という問題に関して、在日朝鮮人
作家の発言を待ちたい。

このことは、金達寿の文学的評価を低めることには決してならないし、むしろ作者の業績を正しく評価するために欠かすことのできない作業だと信じる。

註 第一章

- (17) 金達寿「『玄海灘』について—あるサークルへの答—」(飯塚書店、リアリズム研究会編「文学入門」所収)一九四ページ
- (18) 金達寿年譜(集英社、新日本文学全集第十三巻「金達寿・西野辰吉集」所収)三九九ページ
- (19) 同「前夜の章」「あとがき」(東京書林)一三五ページ
- (20) 同「位置」(東風社「後裔の街」所収)
- (21) 同「労働と創作」(二)「私の歩いてきた道に即して—」(岩波講座「文学の創造と鑑賞」所収)二一七ページ
- (22) 同「雑草の如く」(東風社「後裔の街」所収)
- (23) 同右「二九三ページ」
- (24) 同右「三〇二ページ」
- (25) 同「後裔の街」「あとがき」(朝鮮文芸社)二三五ページ
- (26) 同「盛装したい気持」(「思想の科学」一九六九年九月号所収)一一一ページ
- (27) 同「後裔の街」(東風社)三五ページ
- (28) 同「盛装したい気持」(「思想の科学」一九六九年九月号)一一〇九ページ

第二章 「玄海灘」論

- (29) 年九月号)一〇九ページ
 - (30) 同「母と二人の息子」(東京書林「前夜の章」所収)三三四ページ
 - (31) 同「創作方法をめぐって」(新読書社・リアリズム研究会編「新らしいリアリズムへの道」所収)五四ページ
 - (32) 同右 六〇ページ
- 竹内好の「国がはるびるときは、文学者はたゞ亡国の歌をうたえばいい。かれはたゞ、満腔の熱情をこめてそれをうたえばいい。しかし、いまからそれを始めめるのは少し早すぎばしないかと私は思う(32)」という悲痛な叫びに代表される危機意識が、日本人をとりえた朝鮮戦争、サンフランシスコ講和の翌年、この作品は雑誌「新日本文学」に発表された。
- 作者金達寿は、その時の気持を「深夜、頭上をアメリカ軍航空機のとんでいく爆音をきながら、うんうん唸るような気持でかきつづけた(33)」と記している。
- 祖国を爆撃するために飛びたつ戦闘機の下で、「民族の独立を失った帝国主義治下の植民地人というものが、どういふものであるかということをしめす(34)」ために書かれたこの作品は、日本近代文学のなかで、はじめてインパクトがナルな場における「民族」の発見を通して、

失われた人間性を回復するという実践的課題を提起した。そして、そのことが、戦前からのしどりと朝鮮、中国人へのうしろめたさを感じていた日本の知識人に強い衝撃を与え、深い感動をさそったのである。

もちろん久武田泰淳が言うように、「わざとらしさや性急な所の全くなき、悠々たる文体が、緊張した事態を載せて、大河の如く流れて行く。朝鮮の知識人の苦しみを広く感得した、密度の濃い、骨組みのしっかりした堂々たる長篇(35)」にしたてた作者の構力が、読む者の心を深くとらえたことは言うまでもない。私は、作者の短編小説「釜山(36)」を読んだ時、実によく読者を意識し、細かい計算をしつづけた構成のうまさに感服したことがある。初めに作者は、日本の民主主義文学のなかでも、卓越したストーリーリーターラーの一人であることを、この長編のなかでふたたび確信した。

「玄海灘」には、二つの現実が展開されている。一方には、「怒りなくしてはみられぬ戯画(37)」ともいうべき日本帝国主義治下の植民地人民の悲惨な現実が、そして他方には、特高刑事李承元が語る東学党の乱、三・一独立運動から抗日バルチザンにいたるまでの朝鮮人民が生きた抵抗の歴史が、ともに西敬泰と自省五という二人の知識人の苦悩せる視点を交錯させるなかで描き出されている。

作者金達寿自身、「あとがき」のなかで、「これをかく期間は、周知のように私の祖国朝鮮では熾烈な戦争が

たゞかわれていた。……(略)……わが朝鮮人民軍はよくたゞかかった。その初期においてはもとより、世界最強を誇るアメリカ帝国主義軍を主力とするいわゆる国際連合軍を迎えて、さいごまで堂々とよくたたかっていた。これは歴史が示すとおりである。私はこの日本・東京の一角で、朝鮮人のこのようなエネルギーのよって来たところではどこか、それは決して偶然のものではないというその歴史的裏づけを少しでもしようと思つてこれをかきはじめた(38)」と語っているが、はたして、「『日本帝国主義によって来たえられた朝鮮人(39)』のナショナル・バイタリティーを、どこまでこの作品はほりさげることができただろうか。そしてまた、現代の帝国主義と民族という課題に真正面から取りくんだ文学の方法としてどこまで成功しているだろうか。それを西敬泰と自省五という二人の主人公がとげていく人間変革の過程を追求するなかで考えていくことにしよう。

小説は、日本から渡航してきた西敬泰が、職をもとめて京城日報の社会部長根岸虔一に会いにくるところから始まる。ここで、なぜ彼が、朝鮮総督府の機関紙であり、大新聞社である京城日報へ入ることに激しい情熱をもち、すのか。また、なんのために朝鮮へ帰ってきたのだろうかという疑問が早速読者をとらえる。

この二つの問題から、作者金達寿は西敬泰という青年の性格を浮彫りにしていくのである。作者とおなじ生い立ちをもって育った西敬泰の「成上り根性」が、「大部

数の大きな「大新聞社」への就職、これがいまのところ彼のすべての目的⁽⁴⁰⁾にしてしまった最大の要因であるが、その背景には、貧困な生活をたえぬてきた苦学生特有の「自分の能力を上げ、上へと思われるところへ向けてためし、それを自ら確認し、他人にも確認させて安まろうという木性的なところへ駆られてい⁽⁴¹⁾」く出世欲とともに、日本女性大井公子に対する失態からうけた民族的コンプレックスがよこたわっていた。「彼はこの中尖紙「大新聞」の記者となることで、その失態の痛手を相殺しようとはか⁽⁴²⁾」たのである。

大井公子との出会いから失態にいたるまでの回想は、第五章のなかで詳しく西敬泰によって語られている。これは、日本の天皇制権力下で近代人としての自己を形成した「半日本人」の彼が、始めてぶつかった宿命的ともいへべき差別の壁であった。

一地方紙であるK新聞社の記者をしていた頃、彼は税務所の女事務員である大井公子と軽い気持ちで知り合い、交際を深めていくうちに愛し合うようになった。そして、西敬泰が彼女との結婚を決意した時、抑圧民族と被抑圧民族との間にうちこまれていた亀裂は、容赦なく彼ら二人のうえに襲いかかった。

自分が朝鮮人であるという告白をおえた後、善意のつもりで彼女が言った、「朝鮮の人だ、て、いまはもう日本人でしよう⁽⁴³⁾」(傍点—伊藤)という一言が、彼を三日も四日も苦しめた。「朝鮮人」が「朝鮮の人」と言

いかえられたこと事態、「同情」の眼を意識せずにはいられなかった。そのうえ、交換日記に書かれていた「私は、あの人たち、不幸なあの人たちのために一生をさけるのだ⁽⁴⁴⁾」という不用意な彼女の言葉は、西敬泰に二人の恋愛の決定的な破局を知らせた。

「彼は撫然として、虚空をみつめるような眼をして、前の白い壁をみつめていた。彼は色青ざめ、そしてふるえた。同情それは侮蔑にもまして耐え抜くことのできないものであった。むしろ侮蔑の方が、その方がなれていくだけに、かえって耐え忍ぶことができよう⁽⁴⁵⁾」。この失態こそが、彼に朝鮮への渡航を思い立たせた原因である。

そして、民族的コンプレックスに悩む西敬泰は、その脱出の道を、あくまでも「成上り」コースに固執し、京城日報に入社してからも、出版局校閲部から編集局社会部へ移ることにのみ情熱をかたむけていた。だが、そんな彼でも、いやおうなく植民地朝鮮のみじめな現実を直視し、自己もその民族の一員であることを自覚しなければならぬ事態に遭遇することがあった。

この作者が抑圧された朝鮮人民の生活を描く箇所は、西敬泰が朝鮮人としての屈辱をかみしめていくいくつかの場面とともに、生々しく読者にせまるものがある。たとえば、京城の街角で西敬泰が「皇国臣民」とよばれている趙光瑞につきまわり、「皇国臣民ノ誓詞」を教わるためにつけられた濁酒酒場の異様な沈黙。釜山港から

玄海灘を渡って日本へ流れていく朝鮮人たちが、「一時帰郷証明書」をもって水上警察所の出張所の窓口にならぶ光景。また、そうした同朋をしりめに、いたゞまれぬい断層を感じながらも、日本人にばかり船にのりこもうとした西敬泰が、朝鮮人の特高につきまわり、汚辱をうける場面など、日本帝国主義の残忍な支配と朝鮮人民の苦しみ、更にリアルに描かれている。

西敬泰は、京城日報の社内でも、朝鮮人と日本人の不当な給料の差別や総督府の御用新聞となっている事実を知るなかで、植民地新聞社の封建的な人間関係に大きな反撥を感じていくようになった。彼は、複雑な機構のなかで、人間性をすりへらしていく同僚や校閲部長鳴戸八之進の姿に嫌悪さえおぼえた。だが、そんな彼の心の奥底にひめていた民族の魂をゆりうごかし、近代的な「成り上り」コースの決定的な破産を宣告してくれたのは、冀徳中学の事件であった。

警官にひっぱられていく教師の背後で、「ジョンソンドクリゾマンセイ(朝鮮独立万歳)」と叫ぶ一人の生徒の声によって、「敬泰の涙はどっとあふれおちた⁽⁴⁶⁾」。ここで西敬泰は、はじめて自己矛盾と分裂の極地に追いこまれていた自己の人間性を再建する道を見いだしたのである。

作者は西敬泰という植民地支配によって解体された人間が、つねに朝鮮の新しい現実と直面するなかで人間性

を回復する可能性を追求してきた。そのため白省五と比べて、西敬泰の人間像はいきいきと形象化されている。

だが、もちろん大井公子との人間関係のあいまいさは十分に指摘されなければならない。私は、西敬泰と大井公子の恋愛が、具体的な生活の場における展開ではなしに、交換日記によって破綻するという設定自体に、大きな疑問をいだく。このような描き方が、作者たちリアリズム研究会の人たちによって批判され、のりこえられようとしてきた「私小説的、自然主義的なもの」ではなかったのだろうか。

西敬泰が疎外された人間性の回復の契機を現実のなかに見いだしていくのに対して、白省五の人間変革は、たいへん観念的・思想的におこなわれる。これは、彼の変革が、朝鮮人の特高刑事李承元の語る朝鮮の革命的な民衆のたゞかいの歴史の「教科書」によってもたらされることに起因する。

朝鮮きっての大地主・中級院参議白世弼の嗣子である彼は、東京農科大学在学中、朝鮮の米を研究する小さな会を組織して、日本の警察に弾圧され検挙された経験がある。そのため、いまだに彼は、西大門警察署特高係の「要視察人」となっているが、朝鮮へ帰ってからは「みないこと、きかないこと、いわないこと」の三猿主義⁽⁴⁷⁾をまもって、いたって逃避的で無気力な生活を送っている。

支配者の権力のもとで、すっかり人間性を喪失してし

ま。た彼は、心のうちをひそかに退嬰的だと思つて、朝鮮服を着て、毎朝夕のところへ朝礼に出かけていく。にも、なんら抵抗を感じなかった。白省五は、決して「その目的慣習の垣根をとりのぞこうとはしなかった。むしろさらにそれを強め、隙間のないものに固めていった。なぜならそれを強め固めなければ、彼には生活がはじまるのであったから」である。

そんな彼に立ちまわりの機会をあたえてくれたのが、月に三、四回やってくる特高刑事李承元の話しである。李承元は、植民地朝鮮の悲喜劇ともいふべきエピソードから、民族解放運動の歴史と現実をいたるまで、さまざまな話題を白省五に投げかけ、彼の民族の心をゆり動かしていった。

白省五は、李承元の紹介で金日成の政治工作員、行商人の本と連絡をもつようになり、祖国光復会の国内機関紙「火田民」や会の綱領を讀んで、死んだような自分の生活からぬけ出すことを決意する。そして彼は、以前から夢を感じていた食母の連淑と結婚して、マグネサイト工場でストライキを行なっている城津へ政治工作員として出発しようとするのだが、その時、京城駅を出たところで刑車にとらえられてしまう。このなかで白省五は、実はこれが、朝鮮の民族解放運動を探るために特高刑事李承元がしくんだ謀略であることを、はじめて知るのである。

西敬泰の人間性回復の描写が一応成功しているのに対して、

謀略のためとはいえ植民地朝鮮の真実を語らなければならぬ。「李承元の悲劇」というものは、まるで描かれていない。

正午のボーの鳴りはじめをあいずに鳴りおわるまでの一分間、「聖戦完遂」「前線将兵の武運長久」を「祈念」する黙禱の行事。典型的な「植民地人」の一人である尹鐘との邂逅など、白省五を植民地の苛酷な現実と直面させる努力を作者はしているのだが、彼の人間変革は、どうしても民族の現実から離れた外からの思想の注入による変革としかうけとれない。このことは、彼の近代的自我が、封建的な「家」の束縛から解放された日本において覚醒するという最初からの設定とも無関係ではない。

白省五のリアリティを弱めているもう一つの要因は、連淑との関係である。偶然、連淑が光州学生事件の闘士劉摩植の娘であったりする物語的手法は、必然性をもって事件が進められていくリアリズムの方法とはほど遠いものである。そして、白省五が連淑に結婚を申し込む筋の展開も、いたって安易なものである。

私はむしろ、白省五は、連淑との恋愛をとおして、朝鮮の封建性と「儒教的家族制度」による女性の抑圧という問題にぶつかっていく方向に描かれるべきであったと考える。それは、この封建性が、たんなる前近代的なもの「遺制」ではなしに、帝国主義者の植民地支配の道具として、つねに再生産され、温存されてきたものであるからである。非人間的な他民族支配に対して、あれほ

して、白省五はさまざまな弱点をもっている。なかでも最も大きな弱点は、李承元の話しによって白省五が変革をとげていくという設定そのもののなかにある。

かつて作者金達寿は、白省五が「李承元という警察の特高係をどうして信じ切っていたのか私にはわかりません(44)」という一読者の質問に、「白省五が李承元をさいごまで「信じ切った」かどうかは別として、彼を信じたについては、答は簡単です。それは彼のいうことは正しかったからです」と答え、そこに「李承元の悲劇があり、また白省五の弱さがあった(45)」と書いているが、それにしては不十分である。

近代小説は、政治や歴史の教科書ではなく、文学固有のフィクションを媒介として典型を構成するなかで、客観的現実を反映させるのである。いかに李承元が饒舌であつたとしても、それによって白省五という一度「挫折」を経験した人間の魂をつかみ、行動に立ち上らせるといふのは不自然すぎる。まして、いくら巧みであっても、嘘によって相手の人間を変革するというのは不可能である。もしそれが可能であるとするならば、だまして李承元自身が、なんら人間変革をとげないのはどうしてなのだろうか。

作者にしても、白省五が李承元を全面的に信頼していないことは、彼の転動祝いに青磁の置き物を白省五が送つた時の卑屈な李承元の態度や、連淑が最後まで心を許していないことによって印象づけようとしている。だが、

ど敏感に反応をしめし、怒りをおぼえていた作者が、なぜこの問題を描けなかったのだろうか。

どうしても描けなかった理由として、作者は、「私から早くから自分の故国であり、故郷である朝鮮を奪われていたということも、一つにかぞえられるのではなからうかと思ひます。故国を離れたものは、必然的にその故国を恋しいます(46)」という郷愁感と、「しかも私たちの故国は、たゞ圧迫され、搾取されるばかりではなく、一方で外国化、つまり「皇民化」という嵐に吹きさらされておりました。(略)……これにたいする私たちの反応はどうであつたでしょう。私たちに、いきおい、その反対ならば何でもよい、ということになつたのです。それが朝鮮のものであり、朝鮮的なものであれば何でもよい、それを温存せよ、ということになつた(47)」という一面的な現実認識をあげている。しかし私は、最も根本的な問題として、作者の創作方法を考えなければならぬと思う。

白省五が民族解放運動に参加するようになってから、彼の前には、さまざまな階層の人たちが現われ、なんらかの形で関係をもつようになる。たとえば養生中学の教師林宇載や生徒たち、印刷工の朴定出、そして民族解放運動の機関紙「朝鮮人」を冠岳山の印刷所から運んでくる松の落葉売など、雑多な人たちが登場してくる。ところが、より広い民族的な、かゝい場に出発しようとする直前に、白省五はつかまえて、舞台は留置場

に落ちるのである。このように、広い大衆の生活と結びつけない留置場のような状況を設定して、はたして作者の意図する民族のエネルギーを描くことができるのだろうか。

「皇国臣民」の植光瑞や、釜山の埠頭で日本人にばけていた西敬泰を軽蔑した少年のようになされた抵抗者ははじめとする、より広範な人々と連帯する民族の場、いかえれば、たゞかいかいの場を奪うことによって、自省五の人間性回復は、ますます観念的・思想的なものに、もたれかゝって行くのである。私はこれをリアリズムの挫折といわなければならぬ。

細部にいたるまで被抑圧民族の休息を強く意識させてくれたこの作品が、つねに革命的な民衆のたゞかう姿を「解脱」としてしか登場させることができずに終ったのは、作者金達寿の方法のなかにある、虚構の通俗趣味、通俗性への傾斜の危険性と、作者の現実とのかゝわりにおける主體的な立ち遅れによるものである。もちろん、二人の主人公を設定した二元的視点が、全体を描くうえで困難なものであったことも確かであろう。

作者のよって立つリアリティーは、まだまだ古い「私小説的なもの」から完全に脱皮できたとはいえないし、これほど雄大な民族解放闘争の叙事詩を書く文学の方法としては、まだまだ不十分なものである。私小説的な思考の残りかすとは、いかえれば「被害者意識」のことである。このなかゝらは、決して民族のエネルギーの裏

づけを打けるような、客観的眞実を仮借なく追及する方法としての「リアリズム」や人間性の回復は生れてこない。作者金達寿が自己の現実認識の観念性を徹しく克服し、新しい創作方法を確立されることを切望する。
(いとう・しのぶ)

八註V 第二章

- (32) 竹内好「亡国の歌」(東大出版「国民文学論」所収)二四ページ
- (33) 金達寿「玄海灘」「あとがき」青木文庫(下V)四二八ページ
- (34) 同右 四二八ページ
- (35) 平林一「国民文学の問題」『玄海灘をめぐって』(岩波書店、日本文学協会編「国民文学の課題」一九五四年日本文学協会大会報告)一六九ページ
- (36) 金達寿「釜山」(新読書社、リアリズム研究会編「現代リアリズム短篇小説集」所収)
- (37) 同「玄海灘」(青木文庫(上V)六〇ページ)
- (38) 同右 四二八ページ
- (39) 同右 (青木文庫(上V))一〇ページ
- (40) 同右
- (41) 同右
- (42) 同右
- (43) 同右 一六八ページ
- (44) 同右 一七〇ページ

- (45) 同右 (青木文庫(下V))三五八ページ
- (46) 同右 (青木文庫(上V))五二ページ
- (47) 同右 一四一―一四二ページ
- (48) 同「玄海灘」について―あるサークルへの答(飯塚書店、リアリズム研究会編「文学入門」所収)一九六ページ
- (49) 同右 一九八ページ
- (50) 同右
- (51) 同右
- (52) 同「私の創作体験」(飯塚書店「現代文学講座」所収)一七八―一八〇ページ

〔付記〕
当初の予定では、「朴達の裁判」「密航者」を経て「太白山脈」に至るまでの金達寿の創作方法と民族意識の変革を論究する予定であったが、身辺の煩雑さのためここで筆を置かざるをえなくなったのは残念である。まだ言いたいことがたくさんあるのだが、後日、違ったかたちで発表したいと思っている。編集委員の田中隆久君をはじめ、多くの人たちに御迷惑をかけたことをおわびする。

この小論は、太田正道、上川碩夫両学兄との共作とも言えるもので、私の一年間にわたる両氏宅への居候生活(一九六七年三月―六八年四月迄)の総括ともいうべき

作品である。夜を徹して三人で討論し、真夜中に屋台で食ったラーメンの味が、作日のことのようになつかしく思い出される。その時の激論がなければ、この作品は生れてこなかっただろう。本来ならば共著とすべきところなのだろうが、個々の評価をめぐっていくつかのくい違いがあり、私見だけを述べているので、私の名前だけを書くことにした。もしこの小論に、とるべき成果があるとするれば、それはすべて両学兄の示唆によるものである。また、いろいろと原稿に御批判を下された、松村暢夫学兄にも深く感謝したい。



来年は七〇年、文学をひっさげで、「友の会」のあい言葉である「労働者階級の立場に立って」闘うつもりである。私は学生であるが、「労働者階級の立場」とは、決して一部の人が言うような物理的なものではなく、労働者の生る歴史のなかに生きていくことだと考えている。文学運動の第一線から離れても、文学の第一線からは離れていないつもりである。仲間はずれにしないで下さい。